

# 禅海上人得度の寺 大垣の宝光院成願寺

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**近** 鉄養老線のターミナルである岐阜県の大垣駅から、十分ほど電車で揺られると友江駅に着く。観光地でもなんでもない、まばらな人家と田んぼに囲まれた無人駅だ。私たちの他にここで下車したのは、女性が一人しかおらず、彼女はホームから改札へとつながる踏切をはずれ、呆然と見送る私を尻目に線路を歩いて行ってしまった。

この辺りは、木曾三川からの洪水を防ぐために、集落を堤防で囲った「輪中」の村であったため、輪中館や輪中生活館といった資料館が建てられて、当時の生活を今に伝えている。しかし、今回の私の目的はそこではない。ここには、あの「青の洞門」の禅海上人が得度した寺があるというのだ。

「青の洞門」と禅海は、作家の菊池寛が大正八（一九一九）年に発表した短編小説「恩讐の彼方に」で一躍脚光を浴びた。もっとも作中の法名は禅海ではなく了海という。

了海は俗名を市九郎といい、さる旗本に仕えていたが、その愛妾と密通し、主人を殺して出奔した。その後、信濃から木曾へかかる鳥居峠で強盗を稼業とするが、あるときおのれの罪深さに震え、道なき道を行りに走り、辿りついたのが大垣の浄願寺だった。この浄願寺こそが、「浄」の字こそは違えども、

実在する大垣の宝光院成願寺だという。

この後、浄願寺で得度した市九郎は了海を名乗り、諸人救済の大願のもとに諸国を放浪する。そして、大分県中津市の耶馬溪にある絶壁の棧道を、危うく通う人々のために、享保（一七一六〜三五）の頃から三十年をかけて断崖を穿ち、二百間に余るトンネルを掘り抜くことになる。

さて、友江駅を出て、田んぼの水路を泳ぐメダカや、壁面にへばりつくザリガニなどを見ながら歩き、高い土手の上にあたつと、杭瀬川という小さな川の向こうに堂宇が見えた。どうやら、あれが成願寺らしい。松尾芭蕉に縁のある杭瀬河之翁も知らんのか、と同行者になじられながら杭瀬川に架かる橋を渡れば、果して成願寺にたどり着いた。その山門をくぐった正面のお堂の後ろにまわると、禅海上人供養塔のほか、ノミにツチを振るう禅海のレリーフも建てられていた。これは平成十八年造でまだ新しい。

宝光院成願寺は、大垣近在数百ヶ寺のうち最高格式を誇る寺で、徳川幕府から広大な御朱印地を与えられ、大名といえども断り無しに寺内へ一歩も入ることが出来ず、罪人たちの駆け込み寺になっていたという。

まさに市九郎が得度するに相応しい寺だが、菊池

寛の小説は禅海と「青の洞門」の史実に、地元の伝説を加味したフィクションだ。耶馬溪でトンネルに着手するまでの禅海の来歴については、ほとんどわかっておらず、ここ成願寺で得度したのは、あくまでも物語の了海であって、実在の禅海ではない。しかし、史実であろうがなかろうが、建設の歴史から派生した逸話を、まだ見ぬ土地に訪ね歩くことは、ずいぶんと楽しいものだ。



宝光院成願寺にある禅海上人のレリーフと供養塔（向かって左）

[交通] 近鉄養老線友江駅より、徒歩約40分